2009年3月19日[木] 18:30–20:30 [開場17:30]

会場：オーバルホール　定員：400名　参加費：無料

大阪市北区梅田3-4-5 毎日新聞社ビルB1

主催：国立民族学博物館・毎日新聞社　後援：在大阪インド総領事館

PROGRAME

17：30 ～ 18：30	**受 付**
18：30 ～ 18：35（5分）	**開 会**：岸本 卓也（毎日新聞大阪本社 編集局長）
18：35 ～ 18：40（5分）	**挨 拶**：松園 万亀雄（国立民族学博物館長）
18：40 ～ 19：10（30分）	**講 演1** 「インド西部の暮らしと信仰―包括と分割のはざまで」 三尾 稔（国立民族学博物館 研究戦略センター 准教授）
19：10 ～ 19：40（30分）	**講 演2** 「環流する〈インド〉―海外在住インド人のインパクト」 杉本 良男（国立民族学博物館 民族社会研究部 教授）
19：40 ～ 19：55（15分）	**休 憩**
19：55 ～ 20：30（35分）	パネル・ディスカッション 三尾 稔×杉本 良男 **司会**：寺田 吉孝（国立民族学博物館 民族文化研究部 教授） **総合司会**：信田 敏宏（国立民族学博物館 研究戦略センター 准教授）

CONTENTS

松園 万亀雄「ごあいさつ―国立民族学博物館および公開講演会について」…… 1

寺田 吉孝／信田 敏宏
「講演会テーマ『激動するインド世界―人びとの暮らしから読みとく』について」
…… 2

三尾　稔「インド西部の暮らしと信仰―包括と分割のはざまで」…… 3

杉本 良男「環流する〈インド〉―海外在住インド人のインパクト」…… 7

みんぱくウィークエンドサロン 研究者と話そう …… 11

刊行物紹介…… 12

ごあいさつ
「国立民族学博物館および公開講演会について」

松園 万亀雄（国立民族学博物館長）

はじめに

国立民族学博物館（以下、「みんぱく」と略称）は、毎年、東京と大阪で公開講演会を開催しています。大阪の公開講演会は、2005年から毎日新聞社との共催で、「災害の記憶」（2005年）、「世界の伝統芸能・最前線」（2006年）、「日本で暮らす―移民の知恵と活力」（2007年）、「新しいライフ・デザインを求めて」（2008年）というテーマをとりあげてきました。今年は「激動するインド世界―人びとの暮らしから読みとく」という題のもとに、躍進いちじるしい情報産業、国内および隣国との政治的緊張などで大きな関心をあつめている現代インドを、インド人や海外在住のインド系住民の日常生活を通して眺め、考えることにしました。

大阪での公開講演会は、吹田市にある「みんぱく」の研究者たちの活動を、ひろく関西のみなさんに知っていただき、文化人類学・民族学に関心をもっていただくことを目的としています。

国立民族学博物館は博物館をもつ文化人類学・民族学の研究所です

「みんぱく」は、文化人類学・民族学に関する調査・研究をおこなうとともに、その成果に基づいて、民族資料の収集・公開などの活動をおこなう研究所です。昭和45年（1970年）に開催された大阪万博の跡地内に、昭和49年（1974年）に創設され、その3年後の昭和52年（1977年）11月に一般公開しました。

「みんぱく」は一昨年（2007年）開館30周年を迎え、秋篠宮同妃両殿下のご臨席をいただいた記念式典にくわえて、たくさんの市民にもご参加いただき公開講演会や特別展示など、さまざまの記念行事を開催いたしました。開館30周年を一区切りとして、私たちは人間文化の基礎的研究と、国際開発協力などで社会的な貢献を果たすこと、さらに、研究と展示をとおして文化人類学・民族学の成果を市民の方々に提供していくことを、「みんぱく」の使命と心得、決意をあらたにしたところです。私たちは、文化人類学・民族学の知見をもとに、過去から現代につながる豊かで複雑な人類文化を回顧するとともに、将来の私たちの生活を展望しようとする、興趣あふれる企画をみなさまに提供していくつもりです。

文化人類学・民族学は、現実の生活のなかで育まれている文化に目をむけ、それがどのように変化しているのか、人びとが今求めているのは何か、ということに強い関心をもっています。「みんぱく」の研究者たちが、異国でのフィールドワークを通して何をどのように見てきたのか、その体験から現代世界に何を提言しようとしているのか、耳を傾けてみてください。現代世界が大きく変わりつつあるなかで、「みんぱく」の研究も、ともに動いています。

「みんぱく」の研究、展示、催しものなどの活動について、くわしくは「みんぱく」ウェブサイトをご覧ください（http://www.minpaku.ac.jp）。たとえば、30周年の記念事業として始まった「みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう」は、ご好評を得てその後も続いていますし、講師と内容、日時はウェブページに出ています。現在開催中の特別展「千家十職×民博―茶の湯のものづくりと世界のわざ」やこの特別展に関連する企画や講演会、さらには「みんぱく」にどのような研究者がいてどんな研究活動をしているのか、館内での諸行事など、ウェブサイトで見ることができます。携帯電話でアクセスする方は「みんぱく携帯サイト」をご利用ください（http://www.minpaku.ac.jp/keitai/）。これらの最新情報のほかに、ホームページでは「みんぱく」が展示・収蔵している標本26万点の基本情報を公開し、文献図書資料その他の検索もできます。「みんぱく」の資料を、市民の方々に、大いに利用していただきたいと思っています。

講演会テーマ
「激動するインド世界―人びとの暮らしから読みとく」について

寺田 吉孝（民族文化研究部 教授）／信田 敏宏（研究戦略センター 准教授）

世界をかけめぐるインド世界

インド世界は映画やファッション、料理、ヨガ、音楽、舞踊など、その煌きの世界と伝統文化が、世界中の人びとを魅了し続けてきました。その一方で、急成長する情報通信産業や宗教をめぐる政治対立など、こんにちではビジネスや国際政治の分野でも世界的な関心の的となっています。インド南部に位置するバンガロールと言えば、アメリカのシリコンバレーを上回るハイテク都市として有名です。こうした情報通信産業をはじめとした急速な経済発展の一方で、インドでは、近年、ヒンドゥー・ナショナリズムが台頭し、イスラーム教やキリスト教との宗教対立が先鋭化してきています。インド西部のボンベイでは、1992年から1993年にかけて、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒が衝突し1000人以上が亡くなりました。1995年にはボンベイからムンバイへと名前を変え、繊維産業や映画産業の街から金融中心都市へと名実ともに変貌・発展していきましたが、昨年2008年11月には、このムンバイを標的にした大規模な同時テロ事件が発生しました。その一方で、最近では、ムンバイのスラムを舞台にしたイギリス映画「スラムドッグ＄ミリオネア」がゴールデン・グローブ賞、アカデミー賞など数多くの賞を獲得しました。このように、インドをめぐる話題は、世界中を駆け巡っています。

インド世界の今―人類学の視点

今回の講演会では、インドをフィールドとして研究活動を行なっているみんぱくの研究者が、人類学的見地からインド世界の今を紹介します。グローバル化が急激に進行する中、人びとの日々の暮らしはどのように変化しているのでしょうか？経済発展により生活が豊かになる一方で、なぜ宗教対立が激化し暴力紛争が繰り返されるのでしょうか？インド社会の安全を築くカギはどこにあるのでしょうか？市井の人々の暮らしぶりに焦点を当てる一方、グローバルな視点から現代インドの課題について議論し、激動するインド世界のリアルな姿に迫りたいと思います。

▲ヒンドゥー寺院でサックスを演奏する楽師たち（バンガロール）

「インド西部の暮らしと信仰ー包括と分割のはざまで」

三尾　稔（研究戦略センター 准教授）

1.はじめに

20世紀後半から世界各地で宗教の違いを背景にした暴力的紛争が頻発するようになりました。インドでも同様の傾向がみられ、特にムスリム（イスラーム教徒）とヒンドゥー教徒との間での対立が深刻です。この対立はときに相互の大量殺りくやテロなどに発展します。昨年11月末に起こったムンバイでのテロ事件も記憶に新しいところです。

このような対立は、もともと宗教が相容れない内容を持っているからなのでしょうか?それとも、他の要因によるものなのでしょうか?インド西部の暮らしに根ざした信仰の世界から考えてみたいと思います。

▲ムスリムの集団礼拝（ウダイプル。マスタン・ババの年祭におけるナマーズ）

◀ヒンドゥー教徒家庭の祭壇（ウダイプル。ラクシュミー・プージャーの情景）

2.インド西部の民衆の信仰世界
ー「包括」の知恵ー

次ページの写真はインド西部、ラージャスターン州のスーフィー聖者廟の様子です。スーフィズムはイスラームの伝統に属し、イスラーム世界には幅広く見られます。聖者廟は病の治癒、子授けなどの奇跡を起こすため、ムスリムもヒンドゥー教徒も多数参拝に訪れます。

この聖者廟は、建立も運営もムスリム聖者に帰依したヒンドゥー教徒が行ってきました。ヒンドゥー教徒の弟子の廟も建設されましたが、その廟ではイスラーム風の墓室に偶像がおかれ、両方が拝礼の対象になっています。このような廟は、特異な例ではありません。

暮らしに根ざした信仰の世界では、イスラームとヒンドゥーの違いはあいまいにされています。ムスリムがヒンドゥー教の社や聖者のもとに熱心に参拝する例もよく目にします。

ここに働いているのは、インド文明に幅広く見られる「包括」の原理です。これは、異質なものを異質と認めながら、そのよいところを取りこみ、共に生きてゆく知恵とまとめられるでしょう。カーストも異質な集団を排除する仕組みというよりは、分業・相互依存の制度という側面が強くありました。信仰にもその知恵が生かされてきたのです。

▲スーフィー聖者の墓廟（カパーサン。ババ・ディワナ・シャー廟）

▼墓廟の内部の聖者の墓（聖者は1944年に昇天し、この廟に眠っている）

▶左のスーフィー聖者のヒンドゥーの弟子の墓廟内部（マンダル。デヴィ・ラール・オジャ廟）

▼墓廟の外での悪霊払い（ヒンドゥーのバラモンに憑依した悪霊が払われている）

３.アイデンティティー・ポリティクスへの傾きー「分割」の原理との接ぎ木ー

19世紀後半欧米に国民国家づくり運動や、国家内の民族集団に政治経済的な利益を一致させようという動きが生じ、この動きは20世紀に世界全体の潮流になりました。文化的な共通性に集団のアイデンティティーを求め、その集団に政治経済的な利害を重ねるという考え方は西欧の近代になって初めて生じたものです。

西欧近代文明の特質の1つは、「分割」の論理とまとめられます。これは自他のアイデンティティーを明確化し、差異を強調して、その差異をものや空間にも投影してゆく考え方です。それが集団にも適用されたのが、アイデンティティー・ポリティクスです。

信仰のかたちの違いは、自他の集団の区別をつける際に手頃な標識として利用されます。インドでもそれは例外ではなく、植民地時代にイギリスは支配のためにムスリムとヒンドゥー教徒の間にさまざまな違いを設けました。以前はあいまいだった信仰の世界にも分裂が持ち込まれ、暴力紛争も頻発するようになりました。

独立後しばらくの間この種の紛争はおさまっていましたが、1980年代後半からヒンドゥー文化に基づく国民づくりを目指す政治運動が発言力を増すと、再び対立紛争が激化しました。ヒンドゥー・ナショナリズムは庶民の生活には文化運動として浸透し、都市部を中心とした祭礼復興運動などと結びついています。青年層もこの運動に巻き込まれています。

▲復興したヒンドゥー祭礼（ウダイプル。ジャナム・アシュタミー祭礼の情景）

▲活性化するヒンドゥー祭礼（ウダイプル。ラーム・レワリ祭礼の情景）

▲祭礼主催団体の青年たち（ウダイプル。ガネーシュ・ウトサヴの情景）

４.「包括」と「分割」のはざまで

現在インドで起こっている宗教紛争は、もともと宗教が違うから必然的に起こる宿命的なものとは言えません。むしろ、基層的なインド文明（暮らしの知恵）とは異質な西欧的な近代文明が接ぎ木した結果生じている葛藤の現れと見ることができるでしょう。

好むと好まざるとにかかわらず異質な他者どうしが隣り合って暮らす状況がかつてない規模で生じている現在、いたずらに差異と個性ばかりを強調して他者を排斥することなく、いい意味で良い加減に他者を受け容れ、「いいとこ取り」で暮らしてゆくインド的な知恵には、共生へのヒントが隠されているのではないでしょうか。

また、インドの基層的な文明が近現代文明とどのように交渉し、暮らしの知恵や信仰のかたちを守り、鍛え上げてゆくのかという点には今後も注目してゆきたいと思います。

▲ムスリムとヒンドゥーの共同の食事（ババ・ディワナ・シャー廟の年祭におけるランガルの情景）

環流する〈インド〉―海外在住インド人のインパクト

杉本 良男（民族社会研究部 教授）

1.はじめに

1991年の経済自由化を大きな転機として、インド経済は飛躍的な成長を遂げ、人びとの生活も大きく変化しています。世界のグローバル化によって人と情報の流動化が飛躍的に拡大し、とくにインドの大都市部住民と海外在住インド人とをまきこんだ大きなうねりとなって進行しています。現在海外在住インド人（Overseas-Indians）の数は数千万人といわれています。このなかには、とくにインド国籍をもち続けながら海外に在住するNRI（Non-Resident-Indians）とよばれる人びと、外国籍をとった人びと、すでに何世代か外国に暮らしてインド系住民として定着している人びとなどがいます。

◀チェンナイのショッピングモール

▲パリのインド人

2.グローバル・ローカル・エスニック

インドの食といえば「カレー」です。インドでカレーといえばスパイスをつかった料理の総称であり、われわれの目になじんだカレーライスはその変形で、イギリスを経て日本に伝わったものです。そしていま食文化で進行しているのは、多様化と標準化です。ファストフードや宅配ピザの世界的なチェーン店がインドにも進出し、世界のエスニック料理も流行するとともに、ホテルのカレー・メニューは画一化され、また大きなショッピングモールにはファストフード化された地方料理がならんでいます。タミル人の朝食がほかの地域で軽食になっていたり、田舎風をうたったレストランがみられたりします。

一方、インドの衣といえば女性の「サリー」ですが、これにもグローバル化と地方分化の波が押し寄せています。もともとサリーには地方色が豊かでしたが、今では地方の特色がモチーフとしてとりいれられ、トランスナショナルなサリーがあらわれています。また従来つかわれなかった色合い、デザインなどもつかわれるようになっています。とくにNRIの趣味を反映したいわゆる「NRIサリー」がインド本国でも流行しています。またショッピングモールにはサリーやクルターなどの伝統的な衣装が「エスニック」コーナーにおかれています。そしてインドの有名デザイナーは世界のファッション界の「エスニック」趣味の流行にのって、手仕事を生かした新しいインド・ファッションを生みだしています。

▲バンガロールの宅配ピザ店

▲田舎風レストランのメニュー（アフマダーバード）

▲純白の結婚衣装（ムンバイ）

▲チェンナイの若者

▲大型サリー店のビル（チェンナイ）

▲インド人デザイナーの最新ファッション（コロンボ）

▲ムンバイのブティック

３.インドへの還流

南インド・タミルナードゥ州の州都チェンナイ（マドラス）には90年代から巨大なショッピングモールが進出してきましたが、それを牽引したのは東南アジアや湾岸諸国で財をなしたタミル系の資本でした。そこには従来のインドではみられなかった趣味の商品がならんで、人びとの耳目を引いています。それはインドの社会文化の革新をうながし、あたらしいインド趣味をうみだしています。

また、ここ数年めだっているのは、インド趣味が情報として還流しているだけではなく、じっさい海外在住者がインドに帰ってきていることです。チェンナイ市郊外にはITブームをうけて多くの新興企業が進出していますが、その周辺には高級マンション群が出現し、また一帯の不動産価格も爆発的に高騰しています。こうしたマンションの居住者の中には、欧米から帰国した人びともふくまれています。帰国者は、欧米社会ではあいかわらずインド人への差別感情がぬぐわれていないために住みにくい事情があって、ある程度の財をなすと帰ってくる人があるのだのだといいます。

一方、IT企業につとめる若者は、とくに外資系企業の場合、格段の高給をとっています。それは親の世代が営々として築いてきた給与水準のさらに何倍かにのぼることも珍しくありません。グローバル化によって、変貌のはげしい大都市部とあまり変化していない地方都市や農村との格差が拡大する一方、世代間格差の拡大にもおよんでいます。

▲チェンナイ郊外の高級マンション

▲バンガロールの高級マンション

４.グローバル化とナショナリズム

インドの娯楽の王道をずっとたどってきた映画は、21世紀にはいって衛星放送の普及や娯楽の多様化におされてやや低調になる一方、海外進出をとげてグローバル化の波をうけています。欧米で活躍するインド出身の映画人があられるとともに、インド映画の境界線をどこにひくかがむずかしくなってきています。最近日本でも公開された「行け行け！インド」などにみられるインド・ナショナリズムは、グローバル化が進行する世界に同時並行でおこっているローカル化の動きとみられます。とくに世界経済危機が深刻化するなかで、市場原理よりも国家的統制が重視されるなか、各地でナショナリズムが台頭しています。インド人意識はグローバル化の波とともに世界をめぐってインドに帰り、インド・ナショナリズムを変質させながら世界を環流しています。

【参考文献】
杉本良男『インド映画への招待状』青弓社、2002年
国立民族学博物館（編）『装うインド－インド サリーの世界』千里文化財団、2005年
『季刊民族学』120号、2007年

好評開催中

みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が展示場に登場し、
「現在取り組んでいる研究」「調査している地域（国）の最新情報」
「みんぱくの展示資料」についてお話します。話題や内容は千差万別！！
「それはどうして？」「これは何？」などなど、みなさまの「もっと知りたい！」を、
お気軽にどんどんお寄せください。みんぱくの研究者が展示場でお待ちしております。

時 間：14:30 ▸ 15:30（予定）

※研究公演、映画会等のイベント実施日、および無料観覧日を除く日曜日に実施します。
※都合により、予定を変更することがあります。常設展示場または特別展示場観覧料が必要です。

問い合わせ

電話番号：06-6878-8560 広報企画室広報係
受付時間：平日 8:30～17:15
※受付時間外（土・日・祝日を含む）は、06-6876-2151（代表）へお問い合わせください。
ホームページ：http://www.minpaku.ac.jp/

◀平成20年8月3日（日）に行われた、「ファッションがつくるインド（Fashioning India）」では、杉本教授により、南アジア展示において、サリーの現状とインドの最近の服装について、展示資料を見ながら解説がありました。参加者からは、サリーについての質問などがたくさん寄せられ、気軽な雰囲気で行われました。

■今後の予定

実施日	話　題	話　者	場　所
3月22日（日）	布がむすぶ社会生活：インド	三尾稔 准教授	企画展「インド刺繍布のきらめき」会場
3月29日（日）	太平洋の嗜好品カヴァ	丹羽典生 助　教	オセアニア展示
4月　5日（日）	オセアニアの文化復興	須藤健一 新館長	
4月12日（日）	特別展「千家十職×みんぱく 茶の湯のものづくりと世界のわざ」関連	八杉佳穂 教　授	未 定
4月19日（日）		小林繁樹 教　授	未 定
4月26日（日）	企画展「チベット ポン教の神がみ」関連	長野泰彦 教　授	未 定
4月29日（水・祝）	企画展「ナシ族画家が描く生活世界—雲南省西北部ではぐくまれた絵心」関連	横山廣子 准教授	未 定

※詳細は、ホームページをご覧ください。

4/22発行

刊行物紹介

国立民族学博物館 監修／編集
『旅→いろいろ地球人』

淡交社　予価：1,200円＋税

世界を知る旅—みんぱく愛ランド

世界を股にかけて活躍する
国立民族学博物館（みんぱく）の教員たちが
書きためた旅のエッセイ150篇。
フィールド調査のなかで体験した意外なできごとや、
さまざまな人たちとの出会いの数々…。
旅のプロフェッショナルでも、行く先々で受ける
カルチャーショックには相当なものがある。
ときには、ほろにがい失敗も…。

台湾のベリーダンス教室
（西尾哲夫）

ケニアのとある農村にて、子どもたちには仕事が多い。
（松園万亀雄）

MEMO

MEMO